

私達に与えられた使命

師勝中学校三年 西村 美香

初夏の暑い日差しの中、平和への願いを込めて鳩を飛ばし、私達は被爆者に哀悼の意を込めて平和記念式典に参加しました。原爆ドームのまわりを歩いていると被爆者の悲しい声が聞こえてくるような気がしました。

私が広島を訪れたのは、今回が初めてでした。戦争や原爆という言葉を胸に、広島に行きました。鉄筋の骨組が、一層痛々しい無慚骨灰の廃墟、あの原爆ドームを見ました。当時の人々が抱いた恐怖、絶望、悲しみなど、得体の知れない重々しいものを感じました。

平和記念資料館の展示物には、午前八時十五分で時を止めた時計、黒く炭になった弁当箱のご飯、人の影が焼きついた壁、原形をとどめずに溶けてしまった瓦やビンや茶碗。全身焼けただれてしまった人や紫斑が出たり歯ぐきから流血している人、脱毛してしまった人、そして一瞬にして地獄と化した広島などを写した写真。身の毛がよだつ程、原爆の恐ろしさが感じられました。幼い被害者の写真を見ると、「この子は今どうしているのだろうか。無事に生き抜いてくれたのだろうか。」などと私は思いをめぐらせてしまいました。

また、映像とともに色々な方の被爆体験談が流れていました。隣で寝ていた友人が、次の日になると冷たくなっていったことや、父親が自分の娘を探すために、顔がはれあがって分からなくなった一人一人の顔を覗いて回り娘かどうか確かめていたこと。女学生達が、「早く死にたい。」と言って川に身を投げていたことなどを聞きました。

聞いた話から私は、以前読んだ「はだしのゲン」、「黒い雨」などと同じ衝撃を受けました。被爆で一瞬にして地獄と化した広島。その後にくる友人を亡くした悲しみ。しかしそれらを乗り越えようと、一生懸命生きようとする姿には人間の強さを感じました。

人間に喜怒哀楽の感情がある限り、戦争はなくなるかもしれないかもしれませんが、命の犠牲を払ってまで、憎しみや悲しみを生む戦争を行うことは、絶対にやめなければならぬと思います。国々が、互いを思いやり、助け合ってこそそれは実現できると私は考えます。

歴史を変えることはできません。しかし、唯一の被爆国である私達にしかできないことがあります。それは原爆が投下され、広島、長崎を合わせて三十五万人もの尊い命が失われたという過去の事実を受けとめた上で、私達がそのことを継承し、二度とこのような悲劇を繰り返してはいけなくと訴え続けることです。

戦争や核兵器がない平和な世の中で、一人一人が笑顔でいられる世界を創ることが、今を生きる私達に与えられた使命だと思います。

私が伝えたいこと

西春中学校三年 宮田 知佳

思わず、目を背けたくなるような資料の数々に、私は息をのみました。八時十五分で止まった懐中時計、ボロボロになった学生服、ひどいやけどを負った女性の写真。広島平和記念資料館、ここで目の当たりにした光景は今でも目に焼きついていて、忘れることができません。私は恐ろしさで、胸がしめつけられるような息苦しさを覚え、言葉が出ませんでした。

一九四五年、今から七十年前の八月六日も、今年のような気持ちのよい、晴れた日だったといえます。人々はみな、いつも通りの平穏な生活を送っていました。しかし、一発の原子爆弾によって、一瞬にして、生活は変わってしまったのです。午前八時十五分、突然ピカッと強烈な光が辺りを包み、直後、爆風が吹いて全てが吹きとびました。家も、思い出の場所も、大切な人も、そして、未来をも……。全てを奪っていききました。焼け野原になった町や、変わりはてた姿で横たわる人々。想像するだけで恐怖に襲われます。

広島に投下された一発の原子爆弾は、十数万にもものぼる尊い命を奪いました。悲惨な状況の中、一命をとりとめた人々にも、辛い日々をもたらしました。

「広島をまどうてくれ！（元通りにしてくれ）」松井一實市長が今年の平和宣言で読み上げた言葉です。故郷や家族、そして身も心も元通りにしてほしいという、被爆者の悲痛な叫びが盛り込まれた平和宣言は、私の胸深くに響きました。私は、戦争への思いをより強く持ち直して、黙祷を捧げました。

「祖父母たちが、この七十年間ヒロシマを生き抜いて、私たちに命をつないでくれました。私たちは、今まで受け継がれてきた命と平和への思いを受け止め、考え、自分たちにできることから、『小さな平和』をつくらうとしています。」

こども代表の力強い平和への誓いの言葉です。被爆者の平均年齢が初めて八十歳を超えた今、私たちは、その方々から話を聞ける最後の世代だといわれています。式典に参加して、改めて、事実や被爆者の思いを受け継いでいくことの必要性和責任を感じました。

みなさんにとって、平和とは何ですか。今までに真剣に考えたことがありますか。今回、平和の使者として広島を訪れたことで、私は初めて深く考えさせられました。何気なく過ごしている日常生活も、平和を築いてきたからこそ、送ることができています。今が平和であることに感謝して、一日、一日を大切に過ごしていかなければ、と思います。

広島を考えることは、未来を考えること。二度と同じ過ちを繰り返さないために、世代を超えて、国境を越えて、核兵器の根絶と、平和の尊さを私は伝えていこうと思います。

No more Hiroshima.

僕らのすべきこと

白木中学校三年 松井 慎之祐

七十年！。

あなたは長いと思うだろうか。

それとも短いと思うだろうか。

僕はまだまだ短いと思う。

今年を終戦から七十年の節目の年だ。七十年前のあの日、八月六日も今年と同様、暑く、晴れた日だったという。しかし、七十年前の今日は今年のように平凡な一日ではなかった。

一発の原子爆弾によって！。

もしも今、この瞬間に原子爆弾が落ちてきたらと思うと、背筋が凍る。

僕らの世代は、戦争を体験した人々の話を実際に聞ける最後の世代だと言われている。僕らが戦争の残酷さと平和の尊さを次の世代へと伝えていかなければならない。本当に僕らが次の世代にうまく伝えられるだろうか。心配になってくる。実際に体験したわけではない。僕なんて広島の原爆資料館に展示されている写真を見ただけで気分が悪くなり、直視できなかった。体が拒否反応を起こすくらいの残酷さだった。この残酷さを、どう後世に伝えていけばよいのだろう。その方法が分からない自分が悔しい。伝えたいのに伝えられない。

戦争の残酷さが忘れられてしまえば、きつと平和は崩れてしまうだろう。

だが、そもそも今の日本は平和なのだろうか。今の日本は犯罪が絶えない。殺人であったり、いじめ等による自殺であったりと、心を痛めるような事件が日々繰り返されている。

この状況の日本を、果たして平和だと言っているのだろうか。もし仮に日本が平和であるとしても、世界はどうだろうか。今でも内戦が続いている国や、貧困にあえぐ国が数多く存在している。もし仮に人類が平和であるとしても、他の生物はどうだろうか。人間の身勝手に毎日殺処分される犬や猫同様、虫や植物も平然と人類に殺されている。

この世界には、平和など少しもないと僕は思う。だからこそ、戦争がないことだけが平和であることとは思えない。

では、平和とは何なのか。

僕は広島でそんなことを考えていた。

「すべての命が平等に大切にされ、すべての人が笑顔でいられること。」
これが僕の、「平和」の答えだ。

今の世界からしたら果てしなく遠い課題だ。このまま何もせずに時が流れていくのなら、百年経っても、二百年経っても、平和には届かないだろう。だから今はまず、日本の平和を目指して過去をよく学び、考え、行動していかねければならない。

平和な社会にすることこそが、これからの社会を背負っていく僕らに課せられた使命なのだと思う。それを忘れずにいれば、もっともっと後の世代が全世界を平和にしていってくれれば、僕は信じている。

僕らの使命に気づかせてくれた広島に感謝したい。

現実

訓原中学校三年 谷口 丈一郎

広島は都会で、とてもきれいな街でした。人も多くて、(それは平和記念式典があるからより多いのかもしれませんが)ぎゅうぎゅう詰めの路面電車に乗って見えてきたのが原爆ドームです。原爆ドームから少し歩くともう周りにはビル街で高い建物が連なります。名古屋の中心に突然原爆ドームが現れるようなものです。それはもう現実感がなくて、何かの作り物じゃないかと思ってしまうくらいでした。僕は怖くなりました。

七〇年前の八月六日午前八時十五分、B―二九が落とした原子爆弾が、地上六〇〇メートルで爆発し、広島を地獄へと変えました。家は吹き飛び、鉄は溶け、植物は姿を消し、高い物がなくなった中で積み上げられるのは遺体です。生き残っていても皮膚はただれ、血だらけで、それでも遺体の山から自分の家族を探し出そうとするのです。

平和記念資料館には、原爆が残した物が展示されていますが、これも精巧な作り物のように思えて実感がわきませんでした。ただ悲痛や無惨、グロテスクでもない、形容し難いそのオーラに圧倒されるのでした。

戦争が現実なんだと心に響いたのは被爆者の方の体験談でした。「昨日まで一緒に笑って過ごしていたのにみんないなくなる」「並べられた遺体の中から自分の兄を探すけれど、顔もぐちゃぐちゃで分からない」「本当のことなんだと今まで他人事のように感じていた戦争を身近に感じました。でも、明日から戦争が始まるとか爆弾が落とされるとは考えられず、やはり絶対に起きないことのように思えます。しかしそれは七〇年前の広島も同じじゃないかと思えます。「起きるわけがない!」ということさえ考えもしなかったことが起きて、全てを奪っていったのです。僕もみんなも明日死ぬかもなんて考えもしないですが、そんな中彼らは死んでいったのです。

七〇年の壁を感じます。それはもうとても厚い壁で…。今自分の周りを、いや世界中を探してみても見つけられないことが起こっていたのです。

一つ思います。あの資料館の展示物を七〇年目にして実際に見ても信じられないのに、未来の子どもに、「これは原爆の熱で変形しちゃったビンだよ」とか「ボロボロになった服だよ」「そのときの写真だよ」と言っても分かってくれないでしょうか。これから第二次世界大戦を実際に経験したことはない人だけの世界になっていくでしょう。戦争は現実なのに現実だと信じてくれない人、恐ろしさを理解できない人が増えていくんじゃないでしょうか。それがすごく怖いことだと感じるのです。僕は戦争を経験していませんが、平和の使者として、広島で知ったことを色々な人に伝えたいと思います。戦争の記憶をしっかりとして後世に残し、二度と戦争をしない世界を作ることが僕たちの使命だと思います。

核兵器のない世界を目指して

熊野中学校三年 渡邊 峻

七十年前のその日も今日と同じ暑い日でした。一九四五年八月六日、午前八時十五分。広島の人々は皆、いつもと変わらない朝を過ごしていました。しかし、その日常は一発の原子爆弾によって、一瞬にして変わってしまいました。辺りを見わたすと、火の海の中、指先から溶けた皮膚を垂れ下げながらさまよう人。からだ中にガラスが突き刺さり、もがき苦しんでいる人。僕はこの光景を写真で見た時、言葉を失いました。想像をはるかに超えた原子爆弾の威力に、今までに感じたことが無い恐怖を痛感しました。

平和記念資料館には、このようリアルな現実がたくさん展示されています。一つ一つの資料が、あの日実際にそこにいるかのように感じさせ、胸が強く締めつけられました。

僕は資料館の中で、一枚の写真を見つけ、強く心を打たれました。それは、原子爆弾の被害を受けた子供たちが自分の家族を泣きながら捜している写真です。僕は、まだ幼い子供なのに何でこんなひどい目に合わなければならぬのか、何で両親と離ればなれにならないといけないのか、と強く感じました。実際にその当時の子供たちの気持ちを考えると、その場に立ってられないほど僕は苦しいです。そして、彼らのように多くの人々を苦しめた戦争に対して、強い怒りを覚えました。

では、核兵器は何のためにあるのでしょうか。僕は絶対に必要ないと思います。現在、世界では、核兵器保有国が九か国もあります。また、最近では、イラム国問題もありました。僕はこういつたい戦争が起こるか分からない世の中は本当に嫌です。核兵器のない平和な社会を作るためには、僕たち国民一人一人が平和を願い、核兵器のない社会を実現しようとする強い意志を持つことが大切です。そして、世界中の人々との連帯を強めていかないとけません。

あの日から七十年が経ちました。今では、あたりまえのように平和な日々を過ごしていますが、それは戦後、たくさんの人々が団結し、「絶対に日本を復興させるぞ。」と努力してきたからだだと思います。僕たちはそんな方々に「感謝」すると同時に、その方々のためにも「もう二度と戦争はしない」という強い意志を持ち続けなければならないと思います。

僕は今回、平和の使者として、戦争に悲惨さを実際に学ぶ貴重な体験をさせていただけただけにとっても感謝しています。そしてこの体験から学んだことを多くの人に伝え、広めていくことが今の僕にできることだと思えます。七十年前のあの悲惨な光景を僕たちは絶対に忘れてはいけません。

この世界から核兵器がなくなり、毎日笑顔でいられる日が続きますように。そして、いつまでもいつまでも「平和」が続きますように。

広島いまの涙と現在の平和いまにふるえた夏

天神中学校三年 小宮山 実来

平成二十七年八月六日、七十回目の節目となる「平和記念式典」へ北名古屋より平和の使者として参加させていただきました。広島市は「平和祈念式」となっていました。一文字の違いに広島の方々の心の重みを感じました。猛暑の中、五万五千人の人々が祈り、さらに過去最多の百カ国の代表が参列し初めて米国の政府高官が来ました。原爆ドームの前では多くの人が「核をなくす運動」をしていました。

私はどの遺品にも心が締めつけられました。戦争とはどれほど無駄なもので現在いまがどれだけ平和なのだろうと思いました。戦争の体験をしていない私が、ひどい、かわいそう、悲しい、悔しい、むごい、なぜと思う事は簡単ですが被爆された方々や遺族の方は心が深く傷ついていると思います。今年、被爆者の平均年齢が初めて八十歳を超えました。私達はその心の深い所をもっと知って伝えていかなければならないと思いました。

私が思う現在の日本いまは平和を願っているのに反して、戦争へ銃を持たずに行きなさいと言われている気持ちになります。全国では、平和を願う為の抗議運動が行われています。「七十年前の戦争がまた繰り返されるかもしれない。」と平和を祈りつつ震えた夏でした。

原爆死没者慰霊式を見た百カ国の代表の方々、原爆を投下した米国の政府高官の方々は何を思い、何を感じたのだろうと考えました。自国に帰られたら、日本の苦しみや悲しみを代表として伝えていたいただきたいと思いました。そして、私は世界平和も祈りました。

広島へ行った事により、今まで以上に戦争について真剣に考えるようになりました。そして政治にも関心を持つようになりました。

原爆ドームで見た遺品や佐々木禎子さんの為に折られた約一千万羽の折り鶴などは忘れられないと思います。いつまでも十五歳で感じた戦争への恐怖を忘れずにいたいです。

「平和記念式典」へ参加させていただき、とても勉強になり、少し自分の人生観が変わりました。もう一度、広島へ行って被爆者の生のお話を聞いてみたいと思います。きつと沢山の方々が平和と戦争のない日本を願っているはずです。私も、戦争は絶対にしてほしくありません。これからの日本の平和を守る為に、微力ですがたくさん勉強したり、海外へ行ったりして、視野を広げて生きていきたいと思えます。

今回の経験を一人でも多くの人に伝えていき、平和の輪を作っていきます。